





「寄稿」

『受験の前夜』を讀んで

太田 匡一郎

今年の入試試験の作文は「受験の前夜」と云ふのであつたが、其を通じ多くの者が異口同音かか云つてゐる。○○前夜は出来るだけよく眠つて置かなくてはならない。先生もうちうおつしやつた。父もさうおつしやつた。○○前夜は出来るだけよく眠つて置かなくてはならない。先生もうちうおつしやつた。父もさうおつしやつた。○○前夜は出来るだけよく眠つて置かなくてはならない。先生もうちうおつしやつた。父もさうおつしやつた。

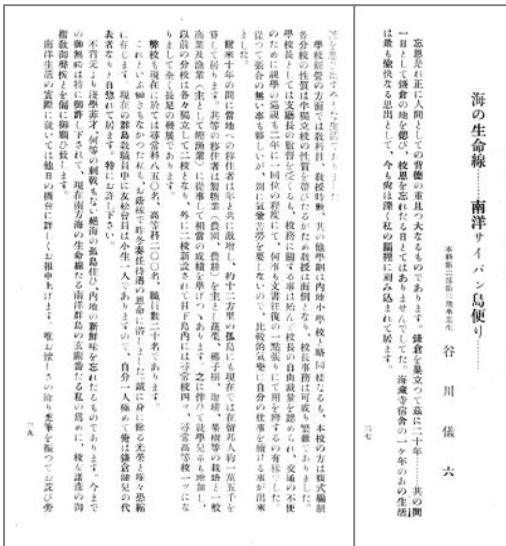
「受験の前夜は出来るだけよく眠つて置かなくてはならない」と云ふのが、其の主旨である。○○前夜は出来るだけよく眠つて置かなくてはならない。先生もうちうおつしやつた。父もさうおつしやつた。○○前夜は出来るだけよく眠つて置かなくてはならない。先生もうちうおつしやつた。父もさうおつしやつた。

寄稿文に「受験の前夜を讀みて」という一文がある。「今年の入学試験の作文は『受験の前夜』と云ふのであつたが、其を讀むと多くの者が異口同音かう云つてゐる」という文で書きだされている。

「受験前夜は出来るだけよく眠っておかなければいけない」「どうしても眠れない。眠ろうと思へば思ふほど眼が冴える」「ひとつ、ふたつ、三つ、四つ・・・、矢張り駄目だ。いよいよいらいらするばかりだ」

『落付け』と云はれた、『呑んでかかれ』と云はれた。「母は仏壇にも神棚にも燈明をあげて黙礼するのであつた。僕も真心籠めて礼拝した」「夕飯は母の丹精の赤飯に、父の心尽しの-----僕の大すきな牛肉だ」このようなことを受験者の殆どが書いていたそうだ。

そこで筆者は、「是が日本の家の相(すがた)だ。親、慈にして子、孝なる其の相は、君、仁にして臣忠なる国の相を小さくしただけの勝れた美しい相だ。(中略)私は、ここにも日本精神を見る」と結んでいる。



「海の生命線……南洋サイパン島便り」という題の寄稿文だ。明治44年卒業の谷川儀六氏の文だが、大変興味あるものだ。

「忘恩是れ正に人間としての背徳の重且つ大なるものであります。鎌倉を巢立って茲に二十年…其の間一日として鎌倉の地を偲び、校恩を忘れたる日とはありませんでした」ではじまり、「南洋サイパン尋常高等小学校」に就任したことが書かれている。

赴任時、児童130名、職員3名で、南洋群島中で児童数が一番多い学校だったそうだ。「私生活は頗る呑気でありました。黒き乙姫様許りなれど亀は居るし、漁族は多いし海は広いし、時々浦島太郎の童話を思ひ出すような生活でありました。学校経営の方面では教科目、教授時数、其の他学則は内地小学校と略同様なるも、(中略)校長事務は可成り繁雑でありました」

最後に「現在、尋常科850名、高等科200名、職員20名」と書かれている。10年の間に在留法人1万五千人になり、漁業・製糖・農耕等で成績をあげていたそうだ。